

終助詞「ね」の用法について

木村 静子

国際大学

日本語プログラム

0 はじめに

文末の述語につく終助詞「ね」を対象に、その用法についての考察を行なう。よって、以下のような、文末の述語ではない言葉についている「ね」は考察の対象から外すことにする。

- ・ 突然いらしたのよ、なんか、お宅さんでこちらと主人、お目にかかったんですってね。それでね、建具みてやるっておっしゃってー（続あうん P281）
- ・ 私ね、洋平を、やっぱりあなたの所で育てて貰おうと思って。（シェフ P97）
- ・ これは、ちっと、冒険だったんですが、でも、この調子なら大丈夫です。もっとも、昔の人がみたら、これでも、結城つむぎかといって、泣いたり、笑ったりするかもしれませんが…時代の感覚ですからね。（夜あけ P51）
- ・ 本当は今日なんですけどね。門倉さんが出られないもんで。（続あうん P221）
- ・ 君子「そういえば、さと子ちゃん、おつき合いしてるかた、いるんですって」
たみ「さと子がですか」
君子「なんか、そんなおはなし、チラっとねえ」（あうん P326）
- ・ あ、ねッ、あれ尾崎直樹でしょう。（幽霊 P68）

1 終助詞「ね」の用法

終助詞「ね」は原則として聞き手がいて、その聞き手に対する発話の中で使われるものである。また、話される事柄について、聞き手も話し手もある程度の情報を持っている時に使われる。しかし、聞き手と話し手のどちらがその事柄についてより多くの情報を持っているかという点で以下のように三つに分けることができるのではないかと考えた。

- ① 話し手より聞き手のほうがより多くの情報を持っていると考えられる場合
 - ② 話し手と聞き手が同じ程度の情報を持っていると考えられる場合
 - ③ 話し手のほうが聞き手より多くの情報を持っていると考えられる場合
- 以下、上記の三つの用法を考えていくことにする。

1-1 話し手より聞き手のほうがより多くの情報を持っていると話し手が考えて発話した場合の「ね」の用法

話し手より聞き手のほうがより多くの情報を持っていると話し手が考えた場合、話し手は自分の持っている情報を聞き手に確かめるという「ね」の働きがある。

- (1) (小学校の廊下で)
大沢「道子ちゃんね？ チャンとあなたのお席、とってあるわよ？」
信義「よろしくお願いします」
大沢「元気そうなお子さんですね？」
信義「は…少し、元気過ぎちゃって…」 (たんこぶ P53)
- (2) 「あんたの女房は妊娠らしいなあ」
「はあ」
「この間、駅の方を歩いているのを見たが、随分、くるしそうだったね」
「この辺にいい医者がいますか」 (海と毒薬 P11)
- (3) しかし、その時、正司は思い出した。
「そうだ。おじさん、らっきょうは、百合科の多年生草本で、地下の鱗茎は、そのままにしようと、だんだんやせ細っていくんだね。」
「そのとおり、理科は満点だ。」 (夜あけ P100)
- (4) 「たのしくないこともないです。きょうみたいにお天気のいい日は。」
「ほう。うまいことをいいますね。じゃ、雨や雪の日は、つらいってわけですね。まったく、百姓仕事は、てんきしだいでしょうね。〜。」 (夜あけ P149)

上記の(1)は、聞き手の子供について、(2)は聞き手の妻について、話し手が感じたところの「元気そうなお子さん」「くるしそうだった」と述べ、聞き手にそれを確認している。(3)は農業をしている聞き手に話し手が知っている理科の知識を述べ確認しているし、また(4)は百姓仕事について話し手が思ったことを、農業をしている聞き手に確認している。つまり、(1)～(4)は、聞き手のほうがよく知っている第三者や一般的なことについて、それらについての話し手の考えや感じたことを、聞き手に確認するという働きが「ね」にあると考える。

次に、聞き手自身に関する用例を見ていく。

- (5) 「恋人がいるんでしょう？ その恋人はどうしたの？」 痛いところをついたらしく、彼女は顔をしかめた。「煮え切らないんです」「うまいってないのね？」
(恋愛 P174)

- (6) 金齒「よしなよ。イタチの奴、金は使っちゃってるよ」
 初太郎「若い奴ア、鷹揚なもんだ。オレはこんどが最後の仕事だからな。〜。」
 初太郎、イタチの前に立つ。イタチ、色を失って、逃げこもうとする。追いか
 けようとする二人。その前にイタチの嫁が立ちふさがる。
 嫁「あんたたちだね。うちのじいちゃん、悪さに誘うの」 (あうん P183)
- (7) 空港で機内持ち込みの荷物の改めがある。私は、母と妹が係官の前でバッグの
 口をあけているのをプラスチックの境越しに見ていた。「ナイフとか危険なも
 のは入っていませんね」 (父 P59)
- (8) 虹平「君がやってることは、レッキとしたユスリだよネ」
 えり「そうネ」 (不倫 P70)
- (9) やがて、受持ちの剣持先生という女の先生が男の子の担当の先生を紹介した。
 「よござんすか、この男の先生が、奥貫先生。私たち二人は、これから仲よく、
 みなさんといっしょに勉強します。わかりましたね。わかった人は手をあげて、
 ハイと言いなさい」 (浅草 P75)
- (10) 良子「でも…お母様がいらっしゃらないと大変ですね。」
 定夫「いやア、馴れてしまえば、はたの人が思う程大変じゃありません。〜」
 (シェフ P87)
- (11) えり「いやだ…泣いてんですか？」
 虹平「イヤ…(涙を拭く)」
 えり「口惜しいんですね」
 虹平「口惜しいというんじゃないの… 〜」 (不倫 P76)

(5)・(6)は聞き手自身のことについて、(7)は聞き手の持ち物、(8)は聞
 き手が行なっていることについて話し手が思ったことを述べたり、また推測して述べ
 たりして、聞き手に確かめている。(9)〜(11)はそれぞれ「わかりました」「大
 変です」「口惜しいんです」と、話し手が聞き手の立場に立って発言し、それを聞き
 手に確かめるという働きをしている。

つまり、(5)〜(11)は聞き手自身に関することや、話し手よりは聞き手の方
 の勢力範囲の事柄について、話し手の考えや感じたことを述べたり、また、周りの状
 況から話し手が推測したりして述べたことを本当にそうかどうか聞き手に確かめたり
 するという「ね」の用法である。更に、聞き手自身に関することや、聞き手の勢力範
 囲のことについて、話し手が聞き手の立場に立って述べ、それを聞き手に確認する
 という用法もある。

この用法では、聞き手に関することを話し手が述べ、相手に確認するのであるが、
 確認することとは、言い換えれば、聞き手に関することを決め付けて述べている
 のではなく、聞き手の意見や考えを聞こうとする向きが感じられ、その分、発話の強

さが和らぐのではないだろうか。

話し手より聞き手のほうがより多くの情報を持っている場合、更に、以下の(12)のような電話でのやりとりの確認や、注文された品の確認((13))、また、(14)のように相手の述べたことを自分の言葉で確認するという用法もある。つまり、相手が述べたことを繰り返すか、又は自分の言葉で述べて、相手に確かめるという「ね」の用法である。

- (12) 電話している信義。

信義「明日の四時。あけぼのスタジオね?判りました。〜。」(たんこぶ P54)

- (13) 四十ぐらいのウエイトレスが注文をとっている。

ウエイトレス「海の幸定食三つね (と書く)」

井口「そう」

(なんだか P97)

- (14) 「まず、あなた自身が好きになれるような自分になることから始めたらどうかしら」と私の声は少しやわらかくなった。

「自分が好きで、素敵だと思える女なら、きっとディスコでも安易に声をかけられなくなるだろうし、恋人もあなたを好きになると思うのよ」

「自分が好きになれるような女、ですね」

(恋愛 P175)

以上、聞き手のほうが話し手より多くの情報を持っていると話し手が信じている場合の「ね」の用法であるが、以上のように、この場合には聞き手に確認するというものであった。

この用法では、話し手の持っている情報を聞き手に確かめているのだが、では、問いかけの用法を持つ「か」との違いは何であろうかということを、ここで少し考えてみたい。

- (15) a 雪子さん、あした雪子さんも東京へ行きますか。

b 雪子さん、あした雪子さんも東京へ行きますね。

(15) a は、雪子さんが東京へ行くかどうかの情報を話し手がまるで持っていないとも言えることは可能だが、(15) b は、雪子さんが東京へ行くという情報を前もってつかんでいて、それを雪子さんに確認するために問いかけている。つまり、「か」は話し手がある事態に対しての情報がなくても可能だが、「ね」は話し手が少しは情報を得ているが、より多くの情報を話し手が持っている信じて、あるいは想像して相手に問いかけていると言えるのではないだろうか。

1-2 話し手、聞き手ともに同じ情報量を持っていると話し手が信じている場合

話し手、聞き手ともに同じ情報量を持っている場合の「ね」の用法を大きく2つに分けてみた。

まず、話し手が、話し手・聞き手ともに同じ情報量を持っていると信じて「ね」を用いて発話する場合には、聞き手に同意を求める働きがあると考ええる。

(16) 尾崎直樹は当然だけど、あなたの奥様ってスタイルいいし、化粧映えるイイ顔してるじゃない。目立つのよね。(不倫 P76)

(17) たみ「ほら、ほら、お父さんアブないー」

仙吉「折詰あるぞ、さと子！」

たみ「もう寝ましたよ」

階段をおりてくるさと子の足。パジャマに腹巻き、セーターをはおっている。

仙吉「(みつめて) お！」

折詰をわたしながら、

仙吉「お前も、世が世なら、水田子爵令嬢なのにー。運のない奴だ。〜。」

たみ「(さと子に) お父さんもお酒弱くなったねえ」(続あうん P219)

(18) 弥生「全く仕様がないオヤジだねえ。でも友ちゃん、恨むんじゃないよ」

友美、立ち止まって振り向き、住みなれたわが家を見回す。(花よめ P46)

(16) では、妻が不倫していることで強迫されている聞き手に対して、強迫者が聞き手の妻について述べているのだが、目立つ顔をしているということは見ればわかることなので、話し手も聞き手も同じ情報量とみなし、同意を求めているとした。

(17) では、酔っ払って帰ってきた夫について子供に話している場面で、妻も子供もどちらも仙吉の日頃の状態をよく知っているので、自分の夫について、お酒が弱くなったと娘に同意を求めている。(18) は、結婚する姪にたいして、叔母が話しているもので、姪の父親のことを両者がよく知っている状況である。

このように話し手と聞き手がともによく知っている第三者について聞き手も同様に思っていると話し手が信じて述べ、聞き手に同意を求める用法である。

(19) 正司と武が、左右からおかあさんをかかえてそれにのり、三平おじさんは、運転台にのった。

「まあ、おつかない病気だね。たった、一日か二日で、うごけなくなるなんて。」

「足のきずでも、ばかにならぬよ。いのちとりになることもあるんだからな。」

(夜あけ P64)

(20) のう、あれで、昼に雨降らんと、天気で、あの日にコンクリの段取りしてたら、

安雄さんもあんなことせなんだんやろうがねえ。人間云うのは、どんな事、起るかわからんもんやねえ…。(岬 P221)

- (21) 役者は基礎が大切だね。若い連中に今まで僕が習ってきたものを残しておきたいな。(浅草 P282)

(19) ~ (21) は一般的なことについての自分の考えを述べ、聞き手も同様に考えていると信じ、同意を求めている。

- (22) 「そろそろ白麻の季節ですねえ、おばあちゃん」父はお洒落で、夏になると毎日白麻の服で会社へ通っていた。「また手入れが大変だ…」「お父さんにそういって、今年こそ数を作っておもらいよ」という母と祖母のやりとりが聞こえてくるのである。(父 P174)

- (23) 弥生「車って言えば幸ちゃん、ハイヤーは何時に来るの？友ちゃん迎えに来る」
幸枝「十一時です」
弥生「(柱時計を見て) あら、もうそんなに時間ないわね。あんた、いくら何でもそろそろ起こさなきゃ」(花よめ P45)

- (24) ○七尾線・車窓風景
邦枝の声「ああ、奇麗だねえ、随分、大きい家」(なんだか P90)

(22) ~ (24) は同じ場を共有している時に聞き手も同様に感じていると話し手が思い、相手に同意を求めている。

以上 (16) ~ (24) のように、話し手と聞き手がよく知っている第三者についてや、一般的なこと、又、場を共有している場合に、聞き手も同様に考えている、感じている、と話し手が考え、同意を求めている。

次に、話し手が述べたことについて聞き手が同意を示す「ね」の働きを見ていく。この同意を示す状況は、先に述べた、話し手が聞き手に同意を求めるのと同じように、互いがよく知っている第三者について、あるいは、場を共有している場合に、話し手が述べたことについて、聞き手が同意を示しているものである。

- (25) 直樹「そういや…そろそろじゃない？」
虹平「(時計を見て)あと、十分ね」
直樹「ちがうよ、しのおさんの一周忌…」
虹平「ああ、そうね」(不倫 P72)
- (26) 井口「君らは、災難だったが、久し振りで、生徒と口きいた気がする」
邦枝「そうでしょうね (と薄く皮肉で苦笑)」(なんだか P108)

- (27) 「なにかがみえちゃったような気がして」と、彼女はぼつりと、遠くをみる目をした。そして、後悔する調子で、「彼の自宅になど、絶対に電話すべきでなかったのよ」と自嘲した。「うんわかる、そうよね」と、私は同意した。

(恋愛 P77)

- (28) えり「今日は、バーマをお願いします。先月仰言ったでしょ、この次なら大丈夫だって…」

虹平「そうでしたね。どういう風にします？」

(不倫 P79)

(25) は話し手の妻の一周忌について、双方をよく知っている聞き手に指摘され、指摘されたことに対して、話し手が肯定している。(26) は相手が自分自身についての思いを述べたのに対して、話し手がそれに同調している。(27) は一般的な道理について述べられたものに対して、話し手が同意を示している。(28) は話し手がかつて述べたことを指摘され、それを思い出し認めている。

- (29) 「俺たち、これで終わりなのかな？」と、カメラマンがなかばあきらめたようにつぶやくわけだ。「そうね、終りね」と女も靴をはいていきかける。(恋愛 P13)

- (30) 梅子「洋平からは電話もかかって来ねえのかい？」

定夫「来ないねえ、何考えてるんだか。～」

(シェフ P94)

- (31) 久江「あなた、話合いに応ずるつもり無いんでしょ？洋平の事で」

定夫「無いね」

(シェフ P88)

(29) ～ (31) は相手の述べたことの一部を繰り返して、相手に同意を示している。

1-3 聞き手より話し手のほうがより多くの情報を持っていると考えられる場合

聞き手より話し手のほうがより多くの情報を持っていると考えられる場合、話し手の思い、考え、また話し手がとった行動を相手に認めさせる、受け入れさせる、また、言いかせるという用法があると考ええる。

- (32) 狂言がつき変わるたびごとに、両側の棧敷には、常連の旦那衆や色町の姐さんたちがズラリと並び、芝居茶屋のお茶子が、ひっきりなしにお茶やお弁当を運んでいた。平土間は椅子に変わり、ちよいと暇をこしらえて、羽織を引っかけた魚やのおかみさんや、前垂れをはずした酒屋の若い衆たちが、「すみませんね、そこ、もう少しつめてくださいな」「オッと、あんちゃん、こっちがあいてる

よ」と、ご順にひざ送りして、仲よく腰をかけあった。(浅草 P223)

(33) たみ「見合い、ことわるんですか」

仙吉「他人に金、用立ててもらって、縁談でもないだろ」

たみ「一 辻本さん、うちがよすぎて、あとのおつき合いが、ねえ」

仙吉「俺の器量からいやあ、帝大出の婿は気が重いね」(あうん P129)

(34) 俺は生まれてはじめて、経理から前借りしたよ。門倉の奴、生まれてくる子供のためにも、例の文化アパートの - あの人にわびしい思い、させたくないって言うんだよ。男なら当然だよ。オレだってそうするね。(あうん P143)

(35) たみ「夜中に爪切ると、親の死に目に逢えませんよ」

仙吉「逢いたかないね」(あうん P98)

(32) は「私のすまないという気持ちを受け入れてください」という使い方で、取りようによってはなれなれしさや押しつけがましさを感じることがある。

(33) は 自分の気が重いという気持ちを相手に認めさせ、だから見合いを断るということ相手を納得させようとしている。(34) も男なら、生まれる子供やその母親にわびしい思いをさせたくないものであり、自分もそう思うという気持ちを相手に受け入れさせ、よって、わびしい思いをさせないために会社から前借りしたことについて、何も言わせないようにしている。

(35) も同様に、「親の死に目になんか逢いたくない」という自分の気持ちを聞き手に認めさせようとするニュアンスがある。

以上、(32) ~ (35) の「ね」は、話し手自身の思いや気持ちを聞き手に受け入れさせるという働きがあると思われる。

次に、(36) ~ (39) は、話し手自身のことではなく、第三者のことや一般的なことを話題にしているが、それについては聞き手より話し手のほうがより多くの情報を持っている場合の「ね」の働きを見ていく。

(36) 無口で少し変った先生だとガソリン・スタンドの主人が批評していたが、勝呂医師は兎も角、少し変っていた。「愛想がないのよ。そうよ。そういう医者はいくいるものよ」と妻は私に言った。「そうかなあ。兎に角、あの気胸針の入れ方はこんな田舎医者には珍しいね。どうして、こんな所に住んでいるのかね」気胸針を患者の胸に突きさすのは何でもないようだが、あれでなかなかムツかしいのだと私は経堂にいた時、通っていた老医から聞いたことがある。

(海と毒薬 P16)

(37) だけど、えっちゃん、それには、どっさりお金がかかるわ。機械も高いし、機械をすえつける工場も、ちっとやそっとのおかねではだめだし…それに、なに

より困ったことには、機械を使って、らくちんな織り方をすると、<結城つむぎ>とはいえないのよ。これはやっぱし、昔どおりに、この古いはたで織るところにねうちがあるのね。」 (夜あけ P18)

- (38) 「手術は無事に終わりましたよ」浅井助手はつとめて平静を装うとして苦しうに微笑したが、声はかすれていた。大場看護婦長が家族たちの体を運搬車からできるだけ遮ろうと中にはいった。「しかし、今晚が山ですね。油断は禁物ですから明後日まで面会は禁止です」 (海と毒薬 P62)

- (39) 氏は、私がもう結構です、と恐縮するほど丁寧になんぞ手にとりて見て下った。大は高さ 12 センチから小は一センチ二ミリの白磁の壺である。「この三つは、ミュージアムピース (美術館もの) だね」というお墨つきをいただき、夕食のご馳走にあずかったのだが、豪快に盃を口に運びながら、小山氏はこういわれた。 (父 P240)

(36) は自分がかかっている医者 of 腕前がたいしたものだと妻に言い聞かせようとするニュアンスがあるし、(37) は はた織りの仕事をしている母親が娘に機械ではなく、はたで織ることにつむぎの値打ちがあるということについて納得させようとしている。(38) は手術を終えた患者の状況を医師が、また、(39) は、焼き物に詳しい話し手が壺を鑑定した結果を、聞き手に断定して述べ、自分の考えを相手に言いきかせていると思われる。

このように (36) ~ (39) は自分の考えや思いを相手に認めさせたり、言いきかせたりする用法であり、それ故に、その多用や使い方が適当でないときにおしつけがましいと感ずることがあるのではないだろうか。

1-4 受け答えが期待できない時に使われる「ね」

終助詞「ね」は原則として、聞き手がいる発話の中で使われるものであると前述したが、話しかけている相手が答えられない赤ちゃんなどや、独り言の場合にも使われている例を以下に記す。これらの「ね」の用法は、1-1 ~ 1-3 で述べた用法と同じと考えてよいと思う。

- (40) 庭先からヨチヨチと入ってくる守。

守「ババア」

門倉、ガバとはね起きる。〜。

守「ババア」

門倉「ババなんかいなよ。迷子になったんだね。よし、オジさんが連れてつ

てやろう」

(あうん P266)

- (41) 一分間では用が足りず、再びかけ直してパート II まで吹き込む人もあったが、面白かったのは黒柳徹子嬢であった。「向田さん？黒柳です」～。つづいて、また、一通話。「向田さん？黒柳です」と同じ調子ではじまって、さっきの続きなんだけど、一分で早いわねえ。ほかの人はみんな一分でちゃんと用が足りのかしら。～。」

(父 P53)

- (42) 「死んだ電報もらって、ほんとうだとは思えなかった。… ねえさん、ほんとに死んだの。え、ねえさん。」おばさんは、おかあさんの顔の白布をとって、じっとみつめた。それから、「こまったね。子供たちを、どうするのさ。」と、しかるようにいって、おかあさんのかみにささっていた、小さいつげのくしで、おかあさんのかみをとかしつけた。

(夜あけ P76)

- (43) 芳子の記憶をたよりに、石塔を捜した。やっとみつけた。線香の代りに煙草をみたてて供えた。それだけで、祖母が気づいてくれるかどうかと芳子が言い、紙を燃やした。炎が、揺れた。「婆は、一人でさびしいか？さびしいことないもんねえ。～。」

(岬 P250)

(40) ～ (43) は相手が返答できる状態ではない時に「ね」が用いられている。

(40) はヨチヨチ歩きの、まだ話ができない子供に、(41) は留守番電話で、(42)、(43) はそれぞれ亡くなった人に対して、「ね」を用いて話しかけている。話し手はもちろん返答は期待していないものの、「ね」を用いることによって、心理的に相手に近づいているのではないだろうか。

- (44) 去年、三十何年ぶりで三社祭を見に行った私は、思わず、「あー男女同権の世の中ね、たしかに」と、つぶやいた。

(浅草 P115)

- (45) どうせ夫はおそいから、食べてもお茶漬けくらいだろうと、自分とふたりの子どものための夕食をつくる。するとたちまち、いてもたってもいられないほどのさびしさがつり、つい、ウイスキーに手がのびる。そのとたん、ぐらりとめまいがした。まだ飲んでもいないのに、目がぐるぐる回る。思わず台所のなかでしゃがみこむ。つづいてはげしい吐き気。ああ、これが主婦の台所症候群ってやつなのね、と、彼女は敗北感のなかで、考える。

(恋愛 P99)

- (46) 風呂敷から大根や葱をのぞかせ、片手には、ちり紙の大きな束を提げ、たみが夕方の買物から帰ってくる。～。二階からは、さと子の弾く琴。
たみ「ー しょうがないねえ。二階に上がってたら、留守番になんないだろ。

ヨイショ！」

ブツブツ言いながら上ってゆく。

(あうん P220)

(44)～(46)はどれも話し手の考えを述べ、それを自分に言い聞かせている。つまり、独り言で「ね」が使用される場合は、述べた事柄を自分に納得させようとする働きがあると思われる。

2 最後に

以上「ね」の用法について、話し手と聞き手のどちらがより多くの情報を持っているかという観点から、①話し手より聞き手のほうがより多くの情報を持っている場合、②話し手と聞き手が同じ程度の情報を持っている場合、③話し手のほうが聞き手より多くの情報を持っている場合の三つに分けて考えた。

①話し手より聞き手のほうがより多くの情報を持っている場合は、聞き手に確認しているし、②話し手と聞き手が同じ程度の情報を持っている場合は聞き手に同意を求めたり、同意を示したりしている。③話し手のほうが聞き手より多くの情報を持っている場合は、聞き手に自分の考えや希望などを受け入れさせるという用法であった。

しかし、次の三点が問題として残った。

- 1 「オレはともかく、さと子にも言ってないのかねえ」のような「～かね」の「ね」はどのような働きがあるのだろうか。
- 2 「～かね」も含まれるのであるが、「いつだね」「だれかね」のような「疑問詞＋か／だ＋ね」の「ね」はどのような働きがあるのだろうか。
- 3 「やっぱりね」「ちょっとね」のように「副詞＋ね」の場合の「ね」も終助詞と言えるのだろうか。

出典

市川森一	「幽霊は不倫する」	『シナリオマガジン』	1986年NO.89	映人社	(ゆうれい)
遠藤周作	「海と毒薬」		昭和35年	新潮文庫	(海と)
沢村貞子	「私の浅草」		昭和62年	新潮文庫	(浅草)
住井すゑ	「夜あけ朝あけ」		昭和40年	新潮文庫	(夜あけ)
中上健次	「岬」		1978年	文春文庫	(岬)
中上健次	「枯木灘」		1980年	河出文庫	(枯木)
布施博一	「僕の父さんはシェフ」	『シナリオマガジン』	1986年NO.89	映人社	(シェフ)
松木ひろし	「目の上のたんこぶ」	『シナリオマガジン』	1986年NO.89	映人社	(たんこぶ)
向田邦子	「父の詫び状」		1981年	文春文庫	(父)
向田邦子	「あ・うん」		平成3年	新潮文庫	(あうん)
向田邦子	「続あ・うん」		平成3年	新潮文庫	(続あうん)
森瑤子	「恋愛関係」		昭和63年	角川文庫	(恋愛)
山田太一	「刑事の恋」	『シナリオマガジン』	1994年NO.178	映人社	(刑事)
山田太一	「何だか人が恋しくて」	『シナリオマガジン』	1994年NO.178	映人社	(なんだか)
山田洋次他	「花よめの父ちゃん」	『シナリオマガジン』	1986年NO.89	映人社	(花嫁)